



| | |
|--------------|---|
| Title | スケルトン方式に於ける室内意匠計画 : センテナリオ402 |
| Author(s) | 谷本, 尚子 |
| Citation | デザイン理論. 2004, 44, p. 168-169 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52968 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スケルトン方式に於ける室内意匠計画 センテナリオ402

谷本尚子／京都工芸繊維大学非常勤講師

1. はじめに

近年、建物の計画段階から住人が参加でき、間取りを自由に計画できるコーポラティブ・マンションが注目されている。今回手がけたセンテナリオ402のインテリア・デザインもこの種のマンションの一室である。こうしたマンションの購入者の多くは、生活機能やモノに対する自分の好みがはっきりしており、日常生活においても自己表現に関する体験を重視する傾向があるように思われる。従って今回の課題は、個別のモノに対する関心に向けられる自己表現から、空間に対する漠然としたイメージを具体化し、住空間全体としての方針を共同で作ってあげていくことになるだろう。発表者が関わったのは、基本プランと内装のコーディネーション及びガラス戸のサンドブラストの図案制作である（図1-

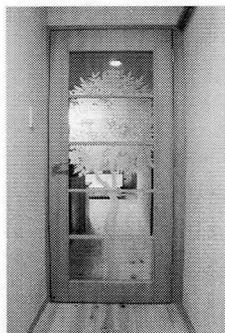


図1-①

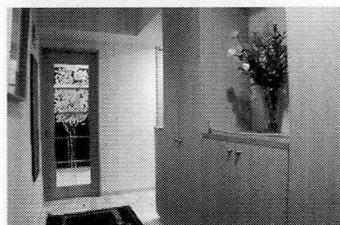


図1-②

①, ②)。(設計, 株式会社ヘキサ。施工, 公正建設。)

2. 制作の概要

入居者は60代後半の夫婦であり間もなく定年を迎えるが、現在は二人とも職業を持ち、夫は油彩画、妻はサンドブラストと書道を趣味としている。今回の施主の希望は、老後を考慮して無駄なモノを処分し、シンプルな生活をしたいということであった。機能性については経験値も高く、生活様式としては近代的なものを求めた。また明るく開放的な空間への憧れがあり、同時に日常的には個別の生活様式があるので個室の要求もあった。

購入区画が決定した時点から要望を聞いてラフプランを提出した。この時点で共同空間を重視した計画にする方針が決定し、キッチン、ダイニング、リビングと和室をワンルームとしても使えるようにすることを提案した（図2）。このLDK+和室空間のポイントは、南と東に広がる大開口部と、洋風のリビングと和室との新しい融合である（図3）。床の間以外の壁には香色に近い珪藻土を用い、床は松の無垢材を用いる等、主に和風の材料を用いているが、デザイン自体は出来るだけモダンな印象を心がけた。

この後の作業の多くは、CADソフト「VectorWorks」で立体化し、施主に対するプレゼンを行っていくというものである。一般人にとって平面図を読みとっていくのはそれほど容易ではない。実際3D化することで、扉や梁、モノの位置関係などが理解でき、施主も空間のイメージが明確になっていったようである。また素材感の再現性としてはソフ

トの限界を感じるが、色彩計画についてはこのシミュレーションが効果的であったように思う。

3. 和室に於ける色彩表現

この住居で最も印象的なのは、床の間の壁の色である。初期の段階では円窓などのアイデアもあったが、中央の床柱と小さなびわ棚だけの踏み床で、壁だけで見せるという方針をとった(図4)。壁の色はDIC日本の伝統色の深緋色(こきび)を指定したが、実際には色見本よりも明度彩度の高い色を用いた。緋という文字は目のさめるような鮮やかな感じを与える糸や布の色を指す。深緋色は緋色(Scarlet)よりも明度が低いが、濃い色であり、住空間の中で大きな割合を占めると煩わしいかもしれない。しかし「充血した目の色を壁掛けの色にするとすばらしい効果を生む」こともある⁽¹⁾。

4. おわりに

今回の基本設計は非常にオーソドックスな

ものである。機能性を重視しながらスケルトン方式のメリットを生かすには、意匠において入居者の自己表現を投影する明確な記号が必要であった。赤は「色相環の最高点⁽²⁾」に位置する色であり、印象的に空間を引き締めることが出来た。

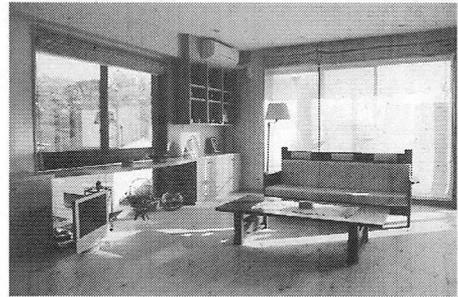


図3



図2

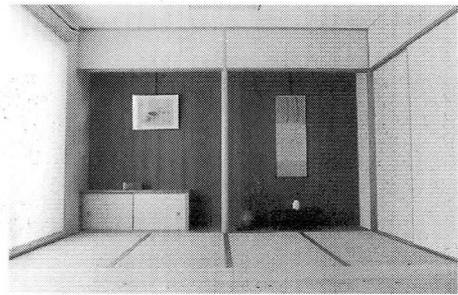


図4

- (1) ルードウィッヒ・ワイトゲンシュタイン 著、中村昇・瀬嶋貞徳訳『色彩について』、新書館、1997年、p. 44。
- (2) J. W. vonゲーテ著、木村直司訳『色彩論』、ちくま学芸文庫、2001年、p. 355。